

回想・津田秀夫と歴史学

岩城 卓二



はじめに

岩城でございます。よろしくお願いします。

津田さんのことをお話するには丸一日は必要ですが、そういうわけにもいきませんので、なるべく時間内にお話しさせていただきたいと思います。

津田さんから、津田秀夫の伝記が書けるんじゃないかと思うぐらい、学生時代のことや戦争時代のこと、それから東京教育大学におられたときのことなど、本当にいろんな話を聞かせていただきました。

滋賀大学の宇佐美英機さんが、私にこんなことを言われたことがあります。それは、近世史サマーセミナーが岡山で開催されたとき、お風呂場でのことなんです。津田先生が真ん中でぼつりと一人で湯船につかっておられる。ところが岩城君はいつでも湯船から出られるように隅っこの方にいる。宇佐美さんは、自分の先生がお風呂につかっているのに何てやつだと思われたそうです。そこで津田先生の横に行って話かけた。すると津田さんは待ってましたとばかりに、もうとにかく延々しゃべり続ける。それを宇佐美さんはただただ、ひたすら聞いていなければいけない。解放されたときには、もう本当に意識もうろうで、ゆでダコみたいになっていたそうです。「岩城君は正しかった」、と言われました。

とにかく自分が一方的にしゃべる。人がしゃべっている間は、次に自分がしゃべることを考え

ている。

また奥田先生からお話がありましたように、とにかくどんな相手にも負けたくない。それが誰だろうが、分野が違う人であろうが、些細なことでも負けたくない。そして、全身から研究者としての迫力がにじみ出ている。津田さんもそれを誇りにされていたんですが、でも決していばっているわけではありませんでした。

大学院生の私にでさえ「先生ではなく津田さんと呼びなさい」と言う。それは研究者としては同じ土俵に上がったんだから、先生と呼ぶ必要はないというんですね。私にとっては紛れもなく先生なんですけど、今日も津田さんと呼ばせていただいているのはそういう理由からです。

津田さんとは、こういう方でした。

私が津田さんのもとで勉強した期間と申しますのは、津田さんが関西大学に来られてから5年後、82年の秋から91年の3月までです。冒頭で伝記が書けるほど話を聞かされたと申し上げたんですが、実は津田さんと時間を共有することができたのは私がちょうど20歳のころから28歳まで、わずか7年半しかないんですね。でも、私には鮮明な記憶が残っていて、今でもあの語り口が聞こえてきそうです。

1. 摂河泉の農村行脚

—摂河泉へのこだわり—

津田さんの学問というのは、奥田先生から詳細なご紹介がございましたように、村方騒動と国訴の研究、それから三大改革の研究、油の研究で、いずれも非常に実証的な成果ですが、それを支えていたのが史料収集です。

交通手段は悪い時代ですし、当然デジタルカメラもないし、マイクロフィルムも、とてもそんなものが自由に使えるような時代ではありませんので、その場で筆写しなければならない。佐々木潤之介さんが追悼文集にお書きになっていますように、津田秀夫の名前というのは、摂河泉の農村史料調査に行くと必ず出くわすといっているかもしれません。

津田さんのこうした農村行脚の原型というのは、奥田先生からご紹介ありました柳田國男さんとのご関係や、一時期、宮本常一さんのフィール

ド調査をお手伝いになったこと、つまり民俗学に深くかかわられたことにあるのではないかと思っています。津田さんの史料調査の足腰というのは、民俗学で鍛えられていったんじゃないのかなというふうに理解しております。戦後歴史学者にとっての民俗学の位置は、考えてみる必要がありそうです。

津田さんは岐阜県中津農林学校の教諭を務められた後、1947年の3月、府立天王寺師範と女子師範を統合したばかりの大阪第一師範学校、現在の大阪教育大学に勤務されます。宮本常一さんというのは天王寺師範のご卒業で、田尻の尋常小学校にご勤務されたようです。偶然だとは思いますが、教師経験があって、ともに師範学校出身なんですね。お二人には何か因縁めいたものがあるのかもしれませんが。

それはともかく、若き近世史研究者であった津田さんは、摂河泉農村を歩き回られました。津田さんの史料行脚は摂河泉だけではなく全国に及んでいます。しかしながら、津田さんがよくおっしゃっていたのは、津田さんにとっての近世史研究のフィールドは、大阪周辺農村だけだったんですね。津田さんの研究対象地域は、畿内であって、津田さんがよく言われていたのは「おれは全国の史料を見ている。でも大阪周辺以外では論文は書かない」でした。これは口癖のようにおっしゃっていました。

津田さんに大阪周辺、特に畿内にこだわる理由というのを尋ねたことがあるんです。津田さんをご自身の研究については、いつもあまりまとものに語られず、宮本常一さんとの関係も、何かはぐらかされるんですね。ただ、どうして大阪周辺にこだわるんですか、という問いかけには、少しまともに答えてくれました。津田さんがおっしゃっていたのは、「おれは畿内こそが日本の近世から近代への変化を考えるための唯一のフィールドだと思っているからだ。そう確信しているからだ」と。

先ほどご紹介がありました大塚さんとの関係についても話してくださいました。奥田先生がおっしゃっていたように、「おれのことを大塚さんは一派だと思ってるんだけど違うんだ」と。でも畿内にこだわった津田さんの研究と大塚史学との関係は、よく考えてみる必要があると思っています。

また、ちゃんと覚えてないんですが、「安良城盛昭が何で天皇制や地主制にこだわると思う？」と言うんですね。「それはあいつの強いこだわりがあって…」という話をしてくださいました。

津田さんは大塚さんや安良城さんのことを話しながら研究対象に学問的なこだわりを持ち続けることの大切さを教えてくれたんだと思います。津田さんは、どこでも何でも、とにかく明らかにしていったら、何かがわかるという素朴な態度では全くありませんでした。畿内しか対象としない津田さんを先進地域主義と批判することもそれは可能なんですが、津田さんが大切にされていたのは、研究対象に対するこだわりだったと思うんですね。これを絶対に明らかにしたいんだという心構えを持てば、それに取り組むための方法・戦略も備わってくるということだったんじゃないでしょうか。

この点に関わってなんですが、1980年代、歴史学には新しい動向が生まれつつありました。その一つが『日本の社会史』全8巻と『日本経済史』全8巻で、ともに岩波書店から80年代後半に刊行されています。津田さんはこの社会史にも、それから数量経済学に基づく経済史にも、とても批判的でした。その理由について、当時、津田さんから二つ聞かされたことを覚えています。

一つは、戦後の歴史学というのは、社会経済史という分野で重要な成果を上げてきた。一体そのどこが問題なんだ、ということだったんですね。また、あたかも社会経済史を社会史と経済史に分断するかのようすることで、「一体何を乗り越えたいのかが、おれにはわからん」というお話でした。

もう一つが、これも大変学問的意味は深いと思うんですが、津田さんがおっしゃっていたのは、社会史のシリーズには近代がない。一方、経済史のシリーズは経済社会の成立を近世に求めて高度経済成長までを叙述するけれども、近世以前の時代は対象から落ちていると。このことを大変問題にされていて、さらに近世だけが社会史シリーズにも経済史シリーズにも含まれていることの意味を、近世史研究者はよく考えないといけない、と言われたんですね。

自分は近世史だから古代史、中世史に関心を持

たなくていい。近代史に見向きしなくていいというわけではない。日本史の中でなぜ自分が近世史をやるのかということをおまえなりに考えてみるということで、結局のところいつも話の終着点はここだったと思います。

II. 東京教育大学の廃学

—現実社会と向き合うこと—

研究者津田さんの学問にとって、大きな転機になったのは、筑波大学開学に伴う東京教育大学の廃学でしょう。

先ほど奥田先生が非常に詳細にご紹介されたように、津田さんの研究に流れていたのは、戦前・戦後を生きたことで、それが村方騒動や国訴といった民衆運動研究だったんだと思いますね。民衆運動研究で、みずからの学問を形成・発展されていった津田さんにとって東京教育大学の廃学というのは、まさに全身全霊をかけた運動の実践だったんだらうと思っています。津田さんにとっては、あれはまさしく闘争だったんでしょう。

津田さんにとって歴史学というのは、過去を明らかにすることだけではなく、今自分が生きている社会といかに向き合うかで、これは完全に一体化していて、分離しない。だから津田さんは、東京教育大学廃学運動にまさに全身全霊をかけたんじゃないでしょうか。東京教育大学廃学を体験された方の中には、津田さんに対していろんな印象があることや批判的な意見があることも聞いておりますが、私はこう理解しています。

また勝手な理解ついでに申しますと、しかしながら津田さんが全身全霊をかけ、懸命な闘争をしたにもかかわらず、結果として筑波大学が誕生してしまった。東京教育大学は廃学になってしまった。私は、このことは津田さんにとって深く傷跡が残るような大きな体験になったんじゃないかなと思います。それは戦争体験と同じくらい。

東京教育大学廃学を体験する前の津田さんのことはよく知りませんが、こうした現実社会の中で運動した、闘争した。しかし筑波大学が誕生してしまった、という体験をされた津田さんと、私は接することになります。津田さんの人生の後半期で、結果としては津田さんの最晩年に当たる時期です。

もう当時、津田さんは60歳を超えておられ、風体は「お茶の水博士」。人の話を聞かないから、聞きたくても今度は耳が悪くなってきて聞こえない。そういう津田さんでした。

奥さんから言われたことがあります。「学生に厳しいでしょう」って。でも私が知っている津田秀夫は、学生に優しい人でしたね。「大学院生のときは論文1本か2本、ドクター以上は年間2、3本は出さなアカン」と、よく言われました。「ほんまかいな」と、ずっと思ってたんですけども、津田さんの著作目録作成のお手伝いをしたとき、津田さんはだいたいそのペースで書かれていることがわかりました。そういう厳しいことも言われたんですが、もう学生には優しくなっていましたね。もちろん、それは津田さんも還暦を過ぎ、健康問題を抱えておられたからでしょうが、津田さんが優しくなったのは、東京教育大学の廃学という体験だったんだと思っています。

東京教育大学の廃学を体験された津田さんは、ここにご出席の皆さんからのお叱りを恐れずに、大変失礼なことを申し上げますと、やや研究の空白期に入っておられた。かつてのように新しい研究に挑戦し、自らを奮いたたせていくという心境ではなかったのではないのでしょうか。関西大学に來られてからの何年間はそうであった、と思っています。

ただ、研究者としての迫力というのは全身からにじみ出ている、還暦過ぎてもなお津田さんは第一線の研究者であり続けたいと、あらゆる学術雑誌の近世の論文に目を通されていました。それは見事なほど読んでおられました。学生が読んでいて自分が読んでいない論文があるなんていうことは、これはもうあってはならないという人でしたから、本当によく目を通されていました。その負けん気が、辛うじて津田さんをささえていたのかもしれない。

本当に勝手な私の理解ですけども、それでも東京教育大学の廃学問題というのは、津田さんにとって大きな体験で、依然、研究者としての迫力は維持されていたけれども、新しい研究に次ぎチャレンジし、生み出していくという津田さんをささえてきた気力は薄れていたんじゃないかなと思っています。あの津田秀夫をもってしてもそ

うなったということだと思っています。

現実社会と向き合う必要性は、よく歴史研究者に言われるんですけども、恐らく本気で向き合うと生半可なものじゃない。深い傷を負うことが多い。それでも向き合う。津田さんのことを思い出しながら、あの東京教育大学の廃学問題というのは、津田さんにとって余りにも大きな体験になったんじゃないかなと考えさせられました。

これが、東京教育大学廃学後に時間を共有した私の津田秀夫像です。

Ⅲ．史料保存問題への関心

史料保存運動へというところに移ります。

津田さんは、お兄さんが経営されていた古書店などを通じて、いろんな文書を収集されてきました。いわゆる“お宝”という非常に珍しい史料も中に含まれております。しかしながら、津田さんにとっての本当のお宝史料って何かと聞かれると、長崎会所文書、一留帳ですねーでもないし、所在がどうなっているかよくわからないんですが、住吉神社の年中行事文書でもなく、東京教育大学廃学と筑波大学開学が日程にのぼり始めたときの、東京教育大学教授会資料だと私は答えたいと思います。

今、その教授会資料がどうなったのか私は知らないんですが、あるときまでは津田さんの研究室のロッカーの下に、非常に無造作に積まれていました。ただ、津田さんが関西大学を退職されるときにはすでになかったと記憶しています。ご自宅に持ち帰られていたのか、そんなことはないとは思ってるんですが、もしかしたら何らかの理由で、廃棄されたのかもしれません。

教授会議事録や事務関係資料というのは、教授会構成員には配付されるものですから、さして珍しいものではありません。もう御本人が亡くなって15年もたってるからいいと思うんですが、津田さんは、関西大学の教授会資料はわりと捨てておられたんですね。だけど東京教育大学の教授会資料は後生大事に、本当にずっと保存されていたんです。

これを見たある方が「津田さんは権威主義だ。国立大学の教授会資料だけ置いて、私立大学のものは残さないというのは権威主義だ。」と言われた



んですが、私はそうは思っていないくて、津田さんにとっては、東京教育大学というのは自分の研究をつくってきた大学としてひとしおの思いがあって、その廃学を阻止する運動というのは、やっぱり津田さんにとって何物にもかえがなかったからだと。教授会資料というのは、津田さんの個人の歩みを語る大切な歴史資料だったんじゃないでしょうか。

東京教育大学の廃学の阻止というのは、津田さんにとっては、大学がいかにあるべきかというのを問うための運動だったんでしょう。津田さんが、21世紀に入った今の大学が抱えている諸問題を予見していたというのは、ちょっと言い過ぎだと思うんですが、少なくとも津田さんは、当時進行していた大学の大衆化ということに対しては、大変な危機感を持っておられて、よくそういうお話も伺いました。

津田さんが史料保存問題に非常に熱心に関心を持たれるようになるのは、私が大学院生の頃でした。津田さんはもともと摂河泉農村を行脚されていたので、国立史料館問題をはじめ史料の保存公開には非常に関心が高く、発言もされてきました。ただ民衆運動研究をベースにつくられた津田さんの学問が、史料保存問題そのものを研究対象とするに至ったのは、東京教育大学の廃学という体験だと理解しています。

歴史学にとって、史料保存問題は大切だとよく言われますが、これは決して自分たちの研究のネタを保存するためではなくて、人びとの苦闘の歴史の歩みを残すことである。だから津田さんにとっては東京教育大学の教授会資料は大切だったんじゃないでしょうか。他にも同じものがあるから残さなくてもいい、という話ではなかった。教授会資料は津田さん個人にとってのまさしく戦い

の記録で、だから津田さんは残し続けたんだろう
と思っております。ですから、津田さんにとって
の史料保存問題というのは、津田さんなりの新た
な民衆運動研究の始まり、幕あけだったんじゃな
いでしょうか。

原史料をクリップで保存したり、ホッチキスど
めをしてみたり、今から考えると驚くような史料
保存というのを津田さんは実践されていましたが、
それはそれでそういうこともあったと笑い話に
すればいいと思うのですが、津田さんの気持ちを
勝手に代弁すると、あのときの津田さんの最大の
関心事は、どう整理するとか、どう保存するか
よりも、なぜ残すのか。歴史学にとってなぜ史料
が大切なのかという根源的な問いだったのではな
いでしょうか。それが摂河泉史料調査と東京教育
大学廃学という実体験から発せられているところ
に、津田さんが『史料保存と歴史学』を刊行され
たことの意味がある、と私は考えています。

おわりに ―教育者として―

最後に、教育者としての津田さんにふれておき
たいと思うんですが、津田さんは自称、あくまで
自称ですが、「すばらしい教育者」でした。しか
しながら、津田さんは、手とり足とり指導をし
てくれるような、今の大学でよく求められている
ような先生では決してなかった。

津田さんは何も教えてくれなかった。古文書の
授業と言っても、ただ学生に古文書を渡して「読
んでこい」と言うだけで、読み方も何も教えてく
れない。自分は辞書の帯に「これをご推薦します」
と書いてるのに、「こんな字典は必要ない」と言っ
てはばからなかった人で、史料の読み方も教えて
くれやしない。ゼミで学生が報告しても、多くは
居眠りして、ただ一人自分が延々しゃべっている
んですね。

ですから、私はある時期まで、自分で勝手に勉
強してきたと思いがっていた。まさしく思いが
っていたんですが、いつからかは定かではない
んですが、津田さんはしっかり教育してくれてい
た、と思えるようになりました。

一つは、今日お話ししましたように、研究対象
に徹底的にこだわるということです。私も摂河泉
がフィールドですが、津田さんに言われたことが、

いつも頭の隅にあります。なぜ摂河泉をやるのか
と。他をやったっていいじゃないか。なぜ摂河泉
をやるのか。研究対象とにかくこだわるという
ことです。

もう一つは、なぜ歴史学をやるのかです。津田
さんは、「何を研究しなさい」とは言わないんで
すね。ただ自分の考えを一方的にしゃべって、そ
の行間を読み取れという教育者だったんですが、
その様々な話を通じて、なぜ歴史学に取り組むの
かという問いへの答えを自分なりに見出せとい
うことを、いつも教えてくれていたんです。あわ
せて、その答えを見出すには現実社会から絶対逃
避してはいけないことも教えてもらっていて、全
くできていませんが、それらが自分にとっては今
も大きいと思っています。

私は、しばしば津田さんのことを茶化すんです
ね。私にとっては先生なんですけども、こんなこ
ともあった、と笑いのネタにするんですが、それ
は津田さんを英雄視してはいけないし、津田さん
の研究に対しても批判的であり続けなければいけ
ない、と思っているがゆえで、私にとっては今で
も津田さんは最も怖い人なんですね。何が怖い
かと言ったら、津田さんの前で研究報告する緊張感
ですね。

今までお話ししたことは、あくまでも私の思い
がこもった「回想・津田秀夫」です。今回、津田
さんの主要な著作も全然読み返していませんの
で、事実認識の誤解も多々あると思うんです。津
田さんの実像については、一次史料に基づいて検
証しないとわからないと思うのですが、エエカ
ッコしいなところや、権威主義的なところも、
もちろんありました。それらを認めたうえで、で
もその津田さんと時間を共有できたということは
本当に幸せだった、と私は思っています。

15年という歳月はちょっと驚きです。津田さ
んが亡くなられて15年もたったんだと。でも
15年を経てなおこうした展示会が開かれて、「回
想・津田秀夫と歴史学」が開かれる津田さんとい
うのは、幸せな人だと思っています。誰しもこ
んな催しは開かれたいわけですし、なによりも今
回の展示は一人の歴史学者を通じて戦後歴史学が
考えられる意義深いものだったと思います。

それは藪田さんの尽力によるところが大きいと

思っています。間違いなく私だとこんなこと面倒くさがってやらないですね。津田さんの史料はあるけど、「まあええんと違うか」って。展示するかとなったら、ちょっと茶化そうと、錆ついたクリップでとめられた史料を展示したりとかやったと思うんです。

津田さんのことを語るにふさわしい方が居られたと思いますし、何度も申しますが、これまでお話ししてきたことは私の津田秀夫像です。研究者としての迫力や重みがある教員が学生に向き合い、緊張感ある「ゆとり教育」の場であった大学。そういう大学で津田さんと時間を共有できたことを感謝しています。何か思い出話のようになりましたが、以上で終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

〈付記〉

なお、このように記録化されるとは聞かされていなかったため、当日は放談の気楽さから随分余計なことを口走っている。さすがに放談にすぎたところは修正を加えたが、記録という性格上、全面的な修正はできなかった。そのため不適切な箇所が多々あることをお許しいただきたい。

岩城 卓二（いわき たくじ）

京都大学准教授。専門は、日本近世史。1963年、兵庫県に生まれる。1991年、関西大学大学院文学研究科博士課程後期課程を中退。国立歴史民俗博物館、大阪教育大学を経て、2006年より現職。

著書に『近世畿内・近国支配の構造』（柏書房、2006年）、論文に「幕末期の畿内・近国社会―摂津国一橋領における御用人足・歩兵徴発をめぐる一」（『ヒストリア』188、2004年）、「歴史教育と教員養成課程の現状―歴史教育の主役は教員である―」（『日本史研究』499、2004年）などがある。